月刊自治研 4 2022 vol.64 no.751

グラビア	地域を支える人 西尾祥之さん・愛媛県宇和島市		1
発掘！地域の希望のタネ	〈高島綿織物〉滋賀県高島市		5
給食のじかん	〈宝塚ねぎの塩こうじ炒め〉 兵庫県宝塚市	中村芽久美	6
書評	高木郁朗 著『戦後革新の墓碑銘』	菅原敏夫	8
焦点	育児・介護休業法改正について ―男性の育児休業取得を中心に	嶋﨑　量	10

特集 〈関係人口〉と地域づくり

共感の相互交流を生む〈関係人口〉	図司直也	16
コロナ禍後の地域おこし協力隊と関係人口	田口太郎	25
ワーケーションと〈関係人口〉	松下慶太	35
関係人口による限界集落の再生をめざした挑戦 ―地域研究ユニット・タテマエの四年間の取り組み	野田　満	44
時代に適応した住民自治活動 ―行政や外部の人達と連携して地域力をあげる	中島聡子	52
世界に広がる〈関係人口〉を生む「自然塾寺子屋」	矢島亮一	59

各県自治研活動レポート	コロナ禍における地域支援の取り組み ―北海道本部	樺澤　康	65
新連載	静岡自治研だもんで！❶ 「やらざあ 静岡自治研」 ―みなさん静岡でお待ちしております！	福井　淳	68
短期連載	東京オリパラ 2020 と自治体の現場❸ 投資に見合う果実は得られず 炙り出された「負」の側面	『都政新報』五輪取材班	70

次号予告・編集部から　80

これを読め！

『戦後革新の墓碑銘』

旬報社　一九八〇円

高木郁朗 著　中北浩爾 編

戦後革新

著者は二〇歳、学生のときに総評のスタッフとして関わる。卒業して社会党本部に書記として就職、政策審議会に配属となる。「戦後革新」（総評社会党ブロック、労働運動、大衆・市民運動などをさす著者の言葉。九六年社会党消滅の頃までの革新勢力の主流）を草創期から語る。自伝でありオーラルヒストリーである。本書には一〇〇人以上の人物が登場する。その流れを整理した編者中北の構成力に驚嘆。

二〇代で、向坂逸郎に嘱望され、社青同の中執も務めた著者はその後、戦後革新を変える、革新することに傾注することになる。六〇年代末に社会党成田委員長のスピーチライター、八六年社会党「新宣言」の原案作成など。

if

著者は自治労とも関係が深い。自治研助言者を長く務めた。本誌の編集委員でもあった。国労とはさらに深く付き合い、分割民営化を見届けた。この二つの組合との関わりは、著者に、歴史の禁句「if」を思い出させることとなった。国労がもし「民主的規制」を運動方針の中心に据えていれば、自治労がもし「地域生活圏闘争」を中心に据えていれば。ここから先は私たちの議論になるだろうが、二つの例は著者の考える戦後革新の重要な考え方と分岐点を示している。

歴史は繰り返す

それは、歴史の原動力は労働。彼岸（理想と革命）ではなく、此岸（現実と生活と現場）に拠点がある、ということだ。

「墓碑銘」とはずいぶんな題だと思ったが、それは戦後革新が現場での役割を果たしきらなかったということに対する表現なのだと。書評子も同意する。

「歴史は繰り返す。一度目は悲劇、二度目は喜劇」がモチーフとして登場している。それを聞くにつけ、本書の価値が、著者が筆をおいたところから再び始まっているように思えてならない。「新しい形での核兵器と国家間の対立が今の世代を覆っている」、労働は貧困に飲み込まれている。戦後革新はまだ役割を果たし終えていない。三度目はさらに大きな悲劇。

評者　**菅原敏夫**　本誌編集委員